

はじめに



平成 26 年度は、海事科学部・大学院海事科学研究科として三つの新しい芽が出た 1 年であった。一つ目は、7 月 31 日に附属練習船深江丸が、文部科学省の教育関係共同利用拠点の認定を受けた芽である。また同時に他大学等の教育関係共同利用が開始され、文部科学省が要求する年間運航日数の 2 割程度（年間 25 日間の航海）が参加大学等に提供された。附属練習船深江丸の教育関係共同利用拠点の認定には、もう一つの意味がある。即ち、教育関係共同利用拠点の認定は、代替新造船の予算獲得の前提条件となっているというのが、これまでの通例である。

二つ目は、代替新造船と同じベクトルを持つ海洋底探査プロジェクトに関する大学院理学研究科惑星学専攻との話し合いの端緒が連携創造本部の仲立ちで開催された芽である。附属練習船深江丸の研究調査に係る機能の強化と同プロジェクトは、密接な関係にあり、近い将来の代替新造船の機能強化に繋がっていく。具体には、練習船としての機能と研究調査船としての機能を高いレベルで満たす代替新造船が今後の神戸大学には求められることになる。当該プロジェクトは人材育成分野と先端研究分野において、神戸大学の機能強化と大学院海事科学研究科の教育・研究の行く末を左右するプロジェクトに育つ可能性を有している。

三つ目は、年次進行で実施予定の平成 29 年 4 月 1 日の大学院改組の芽である。前者 2 つと同じベクトルを盛り込むことが求められる。平成 26 年度に同じベクトルを持つ代替新造船、海洋底探査プロジェクト及び大学院改組が一気に芽を吹き、今後の海事科学部・大学院海事科学研究科の教育・研究のドライビングフォースとなっていくものである。

このように、神戸大学との統合から 11 年目を迎えた海事科学部、大学院自然科学研究科から独立して 8 年目を迎える大学院海事科学研究科は、今後の神戸大学の機能強化の重要な位置を占めることになる。

100 年前の深江キャンパスから仰ぎ見た六甲山稜線と平成 26 年の深江キャンパスから望んだ六甲山稜線は、100 年の時を経ても同じ佇まいである。一方、六甲山から眺望した「茅渚の海」の海岸線は大きく変貌を遂げた。それらの狭間にある深江キャンパスは、大阪湾の変貌と同様に大きく胎動しようとしている。平成 19 年の海洋基本法の施行、同法を具体化した第 2 回目の海洋基本計画が平成 25 年 4 月に閣議決定され、海事科学部・大学院海事科学研究科は強い追い風と追い波を受けつつある。両者は、一見、船速を増加するように考えられるが、ブローチング（船体を一気に回転させ、浮力を奪う現象。）を起こす危険性を孕んでいる。上手く操船をしていくことが肝要である。

本報告書の目的は、第 2 期中期計画期間（平成 22 年度～27 年度）の平成 26 年度に行った諸活動の自己点検及び自己評価を行い、当該中期計画期間の最終年（平成 27 年度）にすべき活動の具体的目標を明確にすることである。

第一編では、第 2 期中期計画のうち平成 26 年度に関わる年次計画を 16 項目にまとめ、各々の項目について、目標と対応状況及び自己評価を記載した。

第二編では、平成 26 年度の年次計画 16 項目の自己評価に用いた根拠データを含めた活動内容、即ち、学部における教育活動、大学院における教育活動、研究活動、国際交流活動、社会連携、高大連携活動の詳細及び諸活動を実践する上での各種委員会の活動と附属センターの活動を記載した。

第三編では、平成 26 年度のトピックスである資質基準システム運用マニュアルの新訂第 2 版と附属練習船深江丸教育関係共同利用拠点化の活動実績を記載した。